

(32)

印度學佛教學研究第 60 卷第 1 号 平成 23 年 12 月

『摩訶止観』病患境に見る五行

渡 邊 幸 江

問題の所在

『摩訶止観』巻八、病患境に説かれる中国医学のなかで、天台大師智顗は五行学説を用いた身体観から観心を化導する。だが、その五行は従来の五行配列「木・火・土・金・水」¹⁾（五臓に配当すれば「肝・心・脾・肺・腎」）ではなく、「木・火・金・水・土」（五臓では「肝・心・肺・腎・脾」）である。つまり、五行全体の配列を無作為に変えるのではなく、「土」（「脾」）のみを最後尾に移動させる。先行研究からも智顗が中国医学を踏襲する事は周知であるから²⁾、中央に置かれるべき「土」³⁾をなぜ智顗が動かすのかは疑問である⁴⁾。また、この「脾」は病患境の初段階と不思議境の最終段階で違いがあり、他の臓腑には見られない配慮がとられている。本稿では智顗の五行の特殊性について考察を試みる。

1. 智顗の文献に見る五行

『釋禪波羅蜜次第法門』には、五行は「心・肺・肝・脾・腎」（五行に置換すれば「火・金・木・土・水」）の配列で説かれている。

二次明五臓生患之相。從心生患者。多身體寒熱口燥等。心主口故。從肺生患者。多身體脹滿四支煩疼悶鼻塞等。肺主鼻故。從肝生患者多喜愁憂不樂悲思瞋恚頭痛眼痛疼闇等。肝主眼故。從脾生患者。身體面上遊風通身痒悶疼痛飲食失味。脾主舌故。從腎生患者。或咽喉噎塞腹脹耳滿。腎主耳故。五臓生患衆多。各有其相。於坐時及夢中察之可知。其相衆多云云⁵⁾。

下記『修習止観坐禪法要』も同様である。したがって、これらは従来の五行配列（木・火・土・金・水）とは全く異なる。

二者五藏生患之相。從心生患者。身體寒熱。及頭痛口燥等。心主口故。從肺生患者。身體脹滿。四支煩疼心悶鼻塞等。肺主鼻故。從肝生患者。多無喜心憂愁不樂悲思瞋恚。頭痛眼闇昏悶等。肝主眼故。從脾生患者。身體面上遊風。遍身瘡痒疼痛飲食失味等脾主舌故。

『摩訶止観』病患境に見る五行（渡 邊）

(33)

從腎生患者。咽喉噎塞。腹脹耳聾等。腎主耳故。五藏生病衆多各有其相。當於坐時及夢中察之可知⁶⁾。

次に、下記は『摩訶止観』病患境から五行配列を取り出し表としたものである。（左から段落、分段、五臓対応、五臓配列）

一、明病相		脈状相	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		面目相	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		害五臓（肝・心・肺・腎・脾）	六氣
		五臓（肝・心・肺・腎・脾・陰）	六神
二、明病起因	二、飲食不節	五味	五臓（脾・肺・肝・心・腎）
	三、坐禪不節	五根（相生關係）	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		眼	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		耳	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		鼻	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		舌	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		身	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		色（相克關係）	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
		夢	五臓（肝・心）
	六、業病	五戒	五臓（肝・心・腎・脾・肺）
三、明治法	坐禪不調（二、氣）	六氣	五臓（肝・心・肺・腎・脾）
五、修止観	思議	五臓（肝・心・肺・腎・脾）	色
		五臓（肝・心・肺・腎・脾）	体生（腎・肺・脾・心・肝）

この表からは二つの特徴が推察される。第一は五行配列が一部の違いこそあれ、基本的には「肝・心・肺・腎・脾」であること。この点は先の前期文献『釋禪波羅蜜次第法門』、『修習止観坐禪法要』に見る五行の無作為性がなく、「脾」のみを最後尾とした移動である。第二は病患境の五行が五臓を中心とした対応関係を持つこと。従来の五行は「木・火・土・金・水」を主軸に、五臓やそれ以外の五常、五戒等を相応させる。だが、病患境の五行は身体の五臓を中心により分科した相応関係を示し、その中に中国医学の基礎理論を化導するという従来とは逆の構造である。

2. 古典資料に見る五行⁷⁾

『摩訶止観』の注釈である湛然の『輔行』には、下記原文二行目に、智顗の五行は『白虎通博物志』に依ると述べ、その配列は「木・火・金・水・土」である。

(34)

『摩訶止観』病患境に見る五行（渡 邊）

次明用觀不調。五塵五藏五行相生相剋。一一塵中復各有五。應須善知相生相剋主對之相。初五色者。如白虎通博物志云。東方木。其帝太皞。其佐句芒。執規而治春。其星太歳。其獸青龍。其音角。其日甲乙其味酸。臭羶。南方火。其帝炎帝。佐祝融。執衡而治夏。其星熒惑。1鳥朱雀。音徵。日丙丁。味苦。臭焦。西方金。帝少皞。佐蓐收。執矩而治秋。星太白。獸白虎。音商。日庚辛。味辛。臭腥。北方水。帝顓頊。佐玄冥。執權而治冬。星辰星獸玄武。音羽。日壬癸。味鹹。臭腐。中央土。其帝黃帝。佐后土。執綱而制四方。星鎮星。獸黃龍。音宮。日戊己。味甘。臭香。佐者主五行之官⁸⁾。

だが、その『白虎通』の五行は古典資料を表とした下記⁹⁾には、「金・木・水・火・土」の配列（五臓では「肺・肝・腎・心・脾」）であり、次の五臓配列の表の『白虎通』の精性の記載には「肝・心・脾・肺・腎」とあるから、どちらも智顗の説く「肝・心・肺・腎・脾」の配列とは異なる。つまり、『輔行』の記す『白虎通』と一致しない¹⁰⁾。また、下記表に見る五行に智顗の説く脾（土）のみを最後尾に動かす配列は確認されない。

1	白虎通義	卷二上	五行	金木水火土
2	漢書	漢書評林卷之二十七	五行志第七上	水火木金土
3	春秋繁露	卷十	五行對第三十八	木火土金水
4	書經	尚書正義 卷十二	洪範第六	水火木金土
5	礼記	附 釈音礼記注疏卷第二十二	礼運第九	水火木金土
6	春秋左伝	附 釈音左伝注疏卷第五十一	杜氏注	金木水火土
7	春秋繁露		五行之義第四十二	木火土金水
8	淮南子	天文訓		木火土金水
9	提謂波利經			木水金火土

下記は根本幸夫・根井養智著『陰陽五行説—その発生と展開』¹¹⁾による五臓配列である。

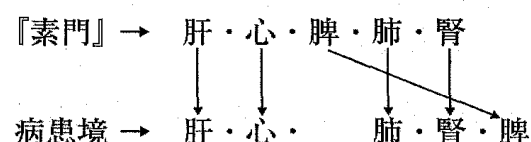
文 献	木	火	土	金	水
管子, 水治篇	脾	肝	心	腎	肺
五行伝, 月令	脾	肺	心	肝	腎
淮南子, 時則訓	脾	肺	心	肝	腎
明堂, 月令	脾	肺	心	肝	腎
礼記, 月令	脾	肺	心	肝	腎
呂氏春秋	脾	肺	心	肝	腎
説文, 月令	脾	肺	心	肝	腎
太玄経	脾	肺	心	肝	腎

淮南子，墜形訓	肝	心	胃	肺	腎
白虎通，精性	肝	心	脾	肺	腎
素問	肝	心	脾	肺	腎
靈樞	肝	心	脾	肺	腎
夏侯伝	肝	心	脾	肺	腎

そして智顗は病患境に「皇帝秘法」に云うが如しとして、『黄庭内経』素門を引き、その原文まで説くが、

又未必一向止心病處。如皇帝秘法云。天地二氣交合各有五行¹²⁾。

『素門』の五行は上記表には「肝・心・脾・肺・腎」であるから、智顗が「皇帝秘法」を引くとはいえ、病患境の配列とは異なる。つまり、これらの資料からは病患境の五行・五臓の配列と一致が見られないのである。



3. 「脾」の説示における相違

智顗の説く「脾」の扱いは他の臓腑にはない特徴がある。たとえば、病患境冒頭の下根を対象に中国医学の病因から病機、治法を説く初段では、平易な表現を用いて「黄」の色を「籠桶」と説く。

是肝害於脾。其色籠桶或如小兒擊櫪¹³⁾。

ところが、最終の階梯「修止観」思議境では、脾を「黄」と説き五行を踏襲した端的な表現を取る。

脾從黄氣生¹⁴⁾。

智顗が病患境初段階に平易に説示し、不思議境に至る思議境に五行の黄を示した理由は、教化段階の相違や衆生の気根を鑑みる配慮を想像するが、詳細な意図は知られない。

また、「脾」は中医学においても説明が困難な臓である。「脾」の作用は運化と昇清（栄養を全身に運ぶ作用）・統血（血液を体外に漏らさない作用）を主る¹⁵⁾であり、今日では脾臓や膵臓を想像することもあるが、作用を重視すれば未だ確証はない。

(36)

『摩訶止観』病患境に見る五行（渡 邊）

4. 考察

「土」（脾）は中央を外れることのない王である。智顗が『摩訶止観』病患境に説く五行は、その王土（脾）のみが最後尾に移動し、前期文献に見る無作為な移動とは異なる。この意図は未だ図ることができない。そこで、智顗の引く『維摩経』から推察を試みたい。智顗は次のように説く。

今我病者從大悲起。以衆生病。是故我病。衆生病愈是故我愈¹⁶⁾。

ここには菩薩の大悲が述べられ、『維摩経』に見る「從癡有愛」の治を想像する。

維摩詰言。從癡有愛則我病生¹⁷⁾。

つまり、智顗は実病（身体の病）の治を説くのではなく、心病「從癡有愛」を対象とし、大悲による治を目的とするのである。推察するに、智顗が王土である脾のみを中央から外す理由は、実病の治との相違を明確にするためではないだろうか。しかしながら、病患境の結語、不思議境には次の一文を見る。

不思議境者。一念病心非眞非有。即是法性法界。一切法趣病是趣不過。唯法界之都無九界差別。

ここには、不思議境は思議を越えた境界であり、病そのままが仏法の世界である。しかも他の九世界と差別がなく、病の實際を悟れば豁然と病は癒えると説かれている¹⁸⁾。

論者は、智顗の説く五行が中央の「脾」を最後尾に動かす意図を検討し、仏法の大悲「治」と身体病「治」の相違を智顗が示そうとしたと推察した。だが、このように智顗の深心に仏の大悲があり、病治共に仏界を外れることがないことも明らかである。「脾」の移動の意図は未だ知られないのである。

最後に、学会発表時に国際仏教大学大学院の特別研究生である曹凌氏より、道教における五行配列の御指摘を賜わった。ここに感謝の意を表したい。

1) 根本幸夫・根井養智『陰陽五行説—その発生と展開』（薬業時報社、1991年）p. 97. 五臓の配当は『素問』を初めとする中医学の文献では、木・火・土・金・水の五行となり、五臓では肝・心・肺・腎・脾である。よってここでは木・火・土・金・水を以って「古典医学の五行」とした。

2) 坂本廣博「『摩訶止観』病患境における五行説」（『天台学報』第29号、1986年）pp. 72-78. 坂本廣博「『摩訶止観』病患境の五行六氣に就いて」（『叡山学院研究紀要』第10号、1987年）pp. 87-101.

3) 『素門』には、「脾者土也。治中央。常以四時長四藏。（中略）岐伯曰。脾脉者土也。（中略）中央土。以灌四傍。其太過與不及」ここには、中央を「土」とし、他の臓を等卒

する内容が示されている。また、『難経』にも、「土主中宮。故在中部也。此皆五行子母。更相生養者也。」とある。

- 4) 五行については、智顗の老莊批判（『摩訶止観』（大正蔵 46, p. 68b19）, 特に「悪魔の比丘」の言における先行研究は、大野栄人『天台止観成立史の研究』（法蔵館, 1994 年）p. 483 の結語に「智顗はとくに老莊に対して批判的立場をとり」、また、「注記に智顗の老莊観に関して、先学の研究を列挙しておく。」として次の諸論文を挙げている。星宮智光稿「天台大師智顗の孔・老二教観—王法観をもとめて（その一）—」（『天台学報』第七号, 1964 年）。山田和夫稿「天台智顗の老莊道教批判」（『東方宗教』第 49 号, 1977 年）。池田魯参稿「智顗教学と老莊思想」（『宗教研究』第 246 号, 1983 年）・同「天台教学と老莊思想」（『駒沢大学仏教学部論集』第 21 号, 1990 年）。これら所論中、山田氏の論文 p. 58 に、智顗の著作中に十三箇所老莊と道教に関する言及があるとし、『摩訶止観』卷五下にまとまった論及が見られると考察されている。
- 5) 大蔵経 46, p. 505c.
- 6) 大蔵経 46, p. 471b.
- 7) 坂本廣博博士の「『摩訶止観』病患境の五行六氣に就いて」には、五行配列の分析・考察が図に依って提示される。だが本論にあげた二点は触れられていない。
- 8) 大正蔵 46, p. 398c.
- 9) 溝口雄三・丸山松幸・池田知久『中国思想文化事典』（東京大学出版会, 2001 年）pp. 469-478 には五行にいくつかのタイプがあることが記されている。
- 10) 『輔行』にはまた「博物志に云く」（大正蔵 46, p. 398c）とあり、同じ原文を『講義』は『輔行』の「亦如博物志」を「文未検」とする。また『輔行』は、方位や四季等を「白虎通」, 「博物志に云く」と注し, 『講義』はこれを白虎通の「二初」としている。事実, 『白虎通』卷二上に「五行」相応の記載があり, また卷三下, 「情性」中に「五臓六腑主性情」が見られ, 五臓と五常の対応も記されている。
- 11) 五行配列は、根本幸夫・根井養智『陰陽五行説—その発生と展開』（薬業時報社, 1991 年）p. 97 を参照。
- 12) 大正蔵 46, p. 108b.
- 13) 大正蔵 46, p. 106c.
- 14) 大正蔵 46, p. 110b.
- 15) 天津中医学院, 学校法人後藤学園『針灸学 [基礎編]』（東洋学術出版社, 1991 年）, p. 432 「71. 目赤腫痛」参照。
- 16) 大正蔵 46, p. 111b.
- 17) 大正蔵 14, p. 544b. 原文の典拠となる『維摩経』には、「是疾何所因起。其生久如。當云何滅。維摩詰言。從癡有愛則我病生」。
- 18) 大正蔵 46, p. 110c 「不思議境者。一念病心非眞非有。即是法性法界。一切法趣病是趣不過。唯法界之都無九界差別。如如意珠不空不有不前不後。病亦如是」。

〈キーワード〉 中国, 天台, 智顗, 『摩訶止観』, 中国医学

（駒澤大学非常勤講師, 仏教学博士）